

ジェンダー学習における気づきと 意識変容のプロセス

— P. クラントンの「意識変容のプロセス」の検討 —

山 澤 和 子

1999年の男女共同参画基本法の施行前後は、女性の意識変容を促すために、各地でジェンダー講座が開講された。それらは性別役割分業観にとらわれていた女性の価値観を問い直し、ジェンダーに敏感な視点を養うための学習である。

本研究は、2000年のジェンダー学習講座の修了生を対象に、修了後6年間の追跡調査をおこない、意識変容の要因のひとつである「確認の気づき」に着目して、学習者の意識変容の分析を行った。メジローの意識変容の理論、ショーンの省察理論を基礎として、「意識変容の学習のプロセス」をモデル化したクラントンの意識変容の理論に、新たな知見を加えた「意識変容の学習のプロセス」のモデル化を試みることを目的としている。

分析の結果、以下のことが明らかになった。第一に、「確認の気づき」には①前提を再肯定し強め行動レベルに進む「確認の気づき」②前提を再肯定し強めるものの意識レベルにとどまる「確認の気づき」③暗黙知を顕在化する「確認の気づき」の3タイプがある。第二に「確認の気づき」が生じる「意識変容の学習のプロセス」は4パターンある。第三に「確認の気づき」が繰り返生じると行動変容に結びつく可能性がある。第四に、学習後にもとの前提が正しいと肯定した場合でも、意識変容が生じている。第五に、「確認の気づき」は、メジローの述べる「混乱するようなジレンマ」の中だけでなく、日常生活でも生じ前提を強める。

以上をふまえて、クラントン研究の「意識変容の学習のプロセス」モデルの精緻化を試みた。

キーワード：意識変容、確認の気づき、前提、ジェンダー学習者、ライフストーリー

1. はじめに

社会教育施設などの講座では、「気づき」を促す意識変容の学習の重要性が認識され、実践されている。とくに各地の女性センター⁽¹⁾では、ジェンダー意識の変容を促す目的の講座が実施されてきた。

学習者の意識変容に関する基礎理論としては、アメリカの成人教育学者であるJ.メジロー及びカナダの成人教育学者のP.クラントンによる理論やアメリカのD.ショーンの省察的実践の理論が注目されている。クラントンは、メジローの理論を基礎とし、学習者自身の「意識変容の学習のプロセス」⁽²⁾に着眼して、その一般的なモデル化を試み、意識変容の研究の必要性を説いている（クラントン1992：145-175）。モデルの作成の際、女性のジェンダー意識変容の事例を取り上げているため、ジェンダー学習者の意識変容を促す講座や活動でのプログラム作成、学習支援者の力量形成にとって特に有用である。

だが、「意識変容の学習のプロセス」の研究は、まだ研究成果の蓄積が十分とはいえず、いまだに研究の余地が多く残されている（クラントン1992=1999：205）。それは、学習が生み出す意識変容のとらえにくさ、客観的な分析が困難なこと、意識変容が長期にわたるプロセスであるため量的な研究が非常に難しい点（クラントン1992=1999：241-242）や、研究に時間を要することにある（小池・志々田2004：11-19）。

「意識変容のプロセス」をより具体的に分析するために、本論では、意識変容が生じる際に関係する「気づき」に着目する。学習者にとって気づきは意識変容をもたらし、さらなる学習の契機や発展の鍵となるものである⁽³⁾。クラントンの理論の土台となっているメジロー（1998：185-186）も、批判的ふり返りを効果的に行うための気づきが重要だと指摘している。

しかし、女性の学習者の意識変容に関する代表的な論文においても、気づきに焦点をあてた分析はされていない（入江1992：223-269、池田2004：116-128、南澤2006：82-95）。山澤は気づきの一部を類型化し⁽⁴⁾、その中の一つに前提を再確認する作用がある「確認の気づき」を析出したうえで、その重要性を指摘しているが、意識変容のプロセスにおける位置や機能を含めた「確認の気づき」の概念化には至っていない（山澤2008：70-72）。

本論では、女性の精神的・経済的自立を養い意識変容を促すジェンダー学習講座の修了生を対象に、修了後6年間の長期にわたる意識変容について追跡調査を実施した。この調査から浮彫りになった気づきのうち「確認の気づき」に着目しその概念化を試みる。さらに、メジローの意識変容の理論、ショーンの省察理論を参照して、クラントンが提唱する「意識変容の学習のプロセス」のモデルに新

たな知見を加える。以上をふまえて、気づきから見たジェンダー学習者の「意識変容の学習のプロセス」に関し、新たなモデルを提示することが本研究の目的である。

2. クラントンによる「意識変容のプロセス」とそれに関する諸理論

本論はクラントンの「意識変容の学習のプロセス」にそって論を展開するが、以下の(1)では、その土台となるメジローの理論を整理し、(2)でクラントンによる「意識変容の学習のプロセス」のモデルを紹介する。次いで、(3)では本論の展開上に重要なショーンの暗黙知の理論を示す。

(1) メジローの意識変容の理論

メジローはフレイレの意識化理論(フレイレ1992:102-118)の影響を受けて、意識変容とは、批判的なふり返し(critical reflection)を通して、意味パースペクティブ(meaning perspective)が変化し⁽⁵⁾、パースペクティブ変容(perspective transformation)が起こること、と述べている(メジロー1990:1-20)。メジローの述べる意味パースペクティブとは、人が物事を判断するための枠組みである。その枠組みは、文化、社会、学習、人間関係などによって作られる。人はこのレンズを通して世の中を見、かかわり、解釈している(メリアム・カファレラ1999=2005:376)。

パースペクティブ変容とは、批判的なふり返しによってそれまでの人生で形成された多くの意味パースペクティブが覆され、抱いていた世界観が変容することである。成人が学習によって意味パースペクティブを変化させると、人生観や生き方も変わる。

例えば、夫や妻の死、離婚、失業、退職、子どもの親からの自立などの人生の危機的な場面にてあった時に、「混乱するようなジレンマ(disorienting dilemma)」を経験し、前提が妥当かどうかを確かめるための批判的なふり返しをおこない、パースペクティブ変容が生じることがある(メジロー1981:14)。

ただし、意識変容の学習⁽⁶⁾によって、既に存在している行動のパターンを再び肯定することがある(メジロー1996:163-164)。常葉-布施が1997年におこなったメジローへのインタビューで、意味パースペクティブの変容と実際の行為の変化とは必ずしも連動しないと述べている点は重要である。つまり、メジローは女性が性役割にしばられない、他の生き方があると知った後に伝統的な生き方を選択した場合にも、パースペクティブ変容であるととらえている(常葉-布施2004:101)。例えば、学習者が「男は仕事、女は家庭」という性別役割分業を逆

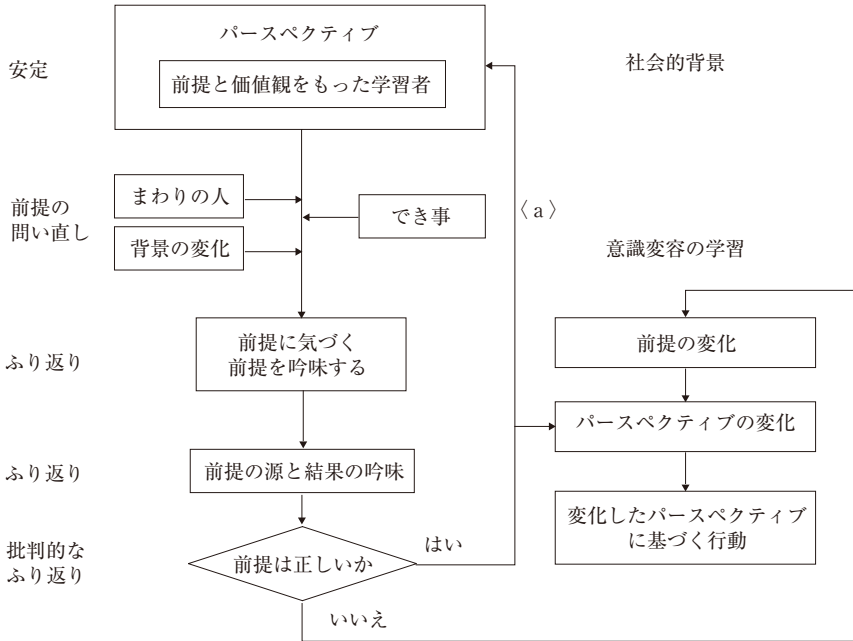
転させる夫婦の存在を知った上で、自ら伝統的な「女は家庭」という従前からの前提を肯定し行動を変容させない場合でも、従来の前提を無条件に受け入れているわけではないならば、意味パースペクティブは変容していると認める。つまりメジローは、後出のクラントンとは異なり、意味パースペクティブの変容が行動にまで結びつくとは、必ずしも考えない。

(2) クラントンの意識変容のプロセス

クラントンは、メジローの意識変容理論をもとに実践的な研究を行なうことによって、「意識変容の学習のプロセス」の一般的なモデルを提示した(図-1参照)。「混乱を引き起こすようなジレンマ」⁽⁷⁾(クラントン1992=1999:205)という表現に見られる通り、メジローの影響を受けていることは明らかである。しかし、ユングの心理タイプ⁽⁸⁾に着目し、意識変容の学習に諸個人の心理タイプにもとづく相違があることを提起している点がメジローと異なる(クラントン2000:181-204)。その上、クラントンは、モデルをさらに「このプロセスはひとり一人異なっているだろうということを忘れてはいけない」(クラントン1992=1999:205)、学習者の意識変容の多様性を指摘する点で、メジローの理論を乗り越えようとしている⁽⁹⁾。

筆者の実施した調査でも、女性のジェンダー学習者達の気づきや意識変容のプロセスは、一人ひとり異なることが明らかになっており、意識変容の多様性に関するクラントンの考察の重要性が追認された。

図-1 クラントンの「意識変容の学習のプロセス」



出典：パトリシア・クラントン著、入江直子・豊田千代子・三輪建二訳『おとなの学びを拓く』鳳書房、1997、p206

「意識変容の学習のプロセス」の一般的なモデル（図-1参照）によると、学習者は、批判的なふり返りを行い、前提や価値観を問い直し、さらにその前提を吟味し、前提の正しさを問い直す。吟味の結果、前提が正しいとの結論が出たときは、もとの前提にもどる。前提が正しいとの結論を得て安定してしまうのは、学習者に変化への準備ができていない時である（クラントン1992=1999：207）。したがってクラントンはこれを意識変容とはとらえない。つまり、前提が正しくないと判断した場合に限り、パースペクティブが変容し、行動にまで進むととらえるのである。意識変容が起こるのは、学習者が、前提に疑問を投げかける周囲の人や出来事、社会的背景の変化によって刺激を受け、「混乱するようなジレンマ」が生じたときである。

メジローとクラントンの相違は、前者が前提の再肯定（行動は不変）をもパースペクティブ変容であるととらえるのに対し、後者は「意識変容の学習は、行動の変化を含むものでなければならない」と、学習による行動への変化を重視する

点にある（クラントン1992=1999：242）。

ただしクラントンは、無意識の状態からの意識変容に関して、研究の必要性を述べてはいるものの、モデルには組み入れていない（クラントン1992=1999：209）。それは、意識変容の研究の事例数が少ないことが関係していると言える。

（3） ショーンの省察的実践の理論

筆者は、クラントンが研究課題と述べる無意識の状態からの意識変容について、ショーンが、暗黙知¹⁰⁰という概念を利用している点に注目する。ショーンは実践者の省察的学習の方法を論証しており、その中で「行為の中の省察」における知（暗黙知）の形成について言及している（ショーン1983：52）。

日常生活での行為は、意識しないまま自然に生じる直感的な行動である。知の形成は、行為のパターンや取り扱う素材に対する触感の中に、暗黙のうちにそれとなく存在しており、（私たちは）行為の最中に驚き、それが刺激となって行為の最中でふり返り、自分自身で認識できていない考え方や知識（暗黙知）を、明らかにすることができる（ショーン1983=2007：50）。

人は難問、困難、興味などを理解するにつれて、行為の中で暗黙になっている理解についてもふり返えるようになる。その暗黙の理解を表面化し、ふり返り、再構築する。そして、将来の行為を具体化するための理解についてもふり返るのである（ショーン1983：50）。

3. 本論における「前提」、 「確認の気づき」、 「意識変容の学習のプロセス」

クラントンの「意識変容の学習のプロセス」モデルと、メジロー、ショーンの理論から本論では次のように「前提」、 「確認の気づき」、 「意識変容」の概念を説明する。

（1） 前提

クラントンは、前提を学習者のニーズの土台になっているもの、私たちの世界観の基礎をなすものとしている（クラントン1992=1999：204）。たとえば、性別役割分業を肯定する世界観を持つ女性の場合は「男性は仕事、女性は家庭」「親の介護は女性がするもの」などが前提にあたる。

本論における前提は、クラントンの前提に関する説明を基準とする。しかし、筆者は前提には「意識化された前提」と「意識化されていない前提」の2種類があると考え。前者は、学習者が自分で具体的な言葉によって表現できる、または言葉で表現できなくても意識できる知が「意識化された前提」であり、後者

は、上述したショーンの述べる暗黙知、つまり、自分自身で認識できていない考え方や知識（暗黙知）を「意識化されていない前提」とする。よって本論では前提を「意識化された前提」と「意識化されていない前提」の2種類に分類して分析を行う。

(2) 意識変容

次に本論の意識変容の定義とクラントンの定義の相違を述べる。

第一に、クラントンは意識変容の学習を行動の変化を含むものとしてとらえているが、本論における意識変容の学習は、行動の変化を含む場合だけでなく、学習者の考えや行動に変容が見られなくても、他者の考え方や行動を認めただけでも意識は変容したとする。それは、パースペクティブが変化したからである。

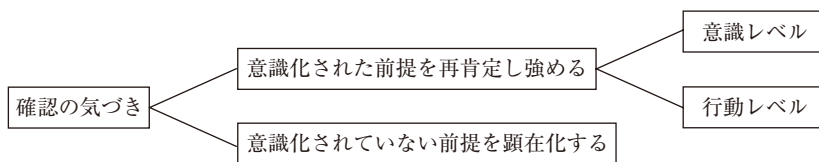
たとえば、「男は仕事、女は家庭」という前提をもつ学習者が、学習前は女性全体に対して「結婚したら女性は家庭で夫を支えるもの」という前提を持っているとする。しかし学習によって、①自分の考えや行動は変わらないが、②「経済的自立をめざす」女性の存在や考え方を認めるようになった場合、つまり他者の生き方を認めるようになったということは前提が変わり意識変容したとみなす。筆者の定義する「意識変容」は行動変容には及ばなくとも「意識変容」とみなす点がクラントンとの違いである。

第二に、クラントンは、「前提は正しい」という結論になった時は、学習者が変化する準備ができていない時と見なしている。しかし、筆者は「前提は正しい」という結論になった場合にも、「確認の気づき」の働きによって前提が強化されているならば、もとの前提と同様ではないので意識変容ととらえる。

(3) 「確認の気づき」

気づきが生じることによって意識変容が起こるため、気づきは意識変容のための重要な因子であるが、これまでは抽象的な概念にとどまっていた。しかし先行的なライフストーリー研究によって類型化され、具体的な内容が少しずつ明らかになっている（山澤2008）。「確認の気づき」には、意識は変わったが行動にまでは直接結びつかない「意識レベル」の気づきと、行動にまで結びつく「行動のレベル」に至る気づきに分けられる（注4参照）。だが、「確認の気づき」には、さらに、「意識化された前提を再肯定し強める」タイプと「意識化されていない前提を顕在化させる」という二つのタイプがあると考え¹¹⁾。

図-2 「確認の気づき」のタイプ



次に、この2タイプを説明する。

①意識化された前提を再肯定し強めるタイプの「確認の気づき」

学習者は、それまでに持っている前提を批判的にふり返り、それを覆すのではなく前提の正しさを再確認し、再び前提を肯定し強めることがある。前提を再肯定し強めることも意識変容ととらえるならば、クラントンの図-1 (a) で、もとの前提にもどる矢印をパースペクティブ変容へとつなげることが可能ではないか。「確認の気づき」は再確認する時に作用し、前提をさらに、量的にも質的にも強く根づかせる。

②意識化されていない前提を顕在化するタイプの「確認の気づき」

「意識変容の学習のプロセス」に関するクラントンの研究は、無意識については言及していない。しかし、ショーンの述べる暗黙知を無意識、つまり意識化されていないもとしてとらえ、それを「意識化されていない前提」と定義する。「確認の気づき」は「意識化されていない前提」を顕在化させる作用があると思われることができる。本論では、ライフストーリーから「確認の気づき」の概念化を試みる。

4. 調査方法と調査対象

本研究は、ジェンダー講座修了生を対象に、6年後にどのような意識変容が生じているのかをライフストーリー法によって追跡調査した。前記の理論を基に下記に提示する検討課題にそって分析を試みた。

(1) ライフストーリー法

クラントンは、意識変容の学習は長期にわたるものと指摘している。メリアムの研究でも、エイズ患者の例を挙げ「混乱するようなジレンマ」が、長期にわたっていることを確認しており（メリアム・カファレラ1999=2005：378）、安藤も長期間に渡る調査の必要性を指摘している（安藤2004：46）。桜井（2003：8）が「わたしが経験したライフストーリー・インタビューでは、男たちは自分の仕

事や地域の社会組織を語る時、また女たちは身近な人物との関係や生活で直面した体験を語る時がもっともいきいきしている」と述べるように、女性の学習者達が内面を語るのにライフストーリー・インタビューは適切である。

学習者にライフストーリーを語ってもらうにあたって、次のような3通りの方法を用いた。最初に、個人インタビューを行い、その後インタビューのトランスクリプトをもとに、学習者にライフストーリーを記述してもらった。最後に、世代別による、グループインタビューを行った。この3通りの方法を行うことにより、ジェンダーに関する気づきが生じ、意識変容が促されることはすでに実証されている（山澤2007：129-138）。

気づきは、ライフストーリーの中で学習者が気づいたと表現したときと、講座の学習支援者であった筆者が、気づきと判断したときの2通りの方法で抽出を試みた。前者は、学習者のインタビューと記述のなかで「確認した、再確認した、やっぱり……だと思った、改めて……だと思った、納得した、実感した」など、再確認しているとだれもがわかるような言葉が使われている気づきを抽出した。それらの語が使われていない例は、ライフストーリーの中で、前提を繰り返して語っている部分を抽出した。

(2) モデル化のための検討課題

クラントンによるモデルを精緻化するにあたって注目するのは以下の4点である。

1) 「確認の気づき」の3タイプ

本論では、図-2にもとづいて「確認の気づき」の3タイプを検討する。

- ① 意識化された前提を再肯定し強め行動レベルに至るタイプ
- ② 意識化された前提を再肯定し強めるものの意識レベルにとどまるタイプ
- ③ 意識化されていない前提を顕在化するタイプ

2) 行動におよばない意識変容

クラントンのモデルは行動変容に至るものだけを意識変容ととらえて作成されている。筆者は、「確認の気づき」には前提を再肯定し、強める場合があることを明らかにした上で、行動の変化に至らない意識変容の学習の意味を明示化する。

3) 「混乱するようなジレンマ」の中だけではなく「日常生活」の中でも生じる意識変容

クラントンはメジローの理論を踏まえ、人生の危機的な状況である「混乱するようなジレンマ」の中で、学習者が前提を批判的にふり返ることにより、それまでの前提が覆され意識変容が生じると述べている。これに対し筆者は、成人の学習者の場合、意味パースペクティブの変化や意識変容は、「混乱するようなジレンマ」の中でしか生じないとは考えない。とくにジェンダー学習者の場合は、日常の学習機会や生活の中で、前提を覆すほどではない気づきが生じ、意識変容が起こることが重要だと考える。

4) 「確認の気づき」が生じる「意識変容の学習のプロセス」のパターン

「確認の気づき」が生じる「意識変容の学習のプロセス」とは、どのようなプロセスなのであろうか。本論での意識変容の学習の定義により、まず意識変容のプロセスを整理し、以下の3パターンに分類しておく。

- (a) 意識化された前提が変化し意識変容するプロセス
- (b) 意識化された前提を再肯定し意識変容するプロセス
- (c) 意識化されていない前提を顕在化し意識変容するプロセス

本論では「確認の気づき」は (b)、(c) の「意識変容の学習のプロセス」に関わると考えるが、モデルの精緻化を行うにあたっては、上記の3パターンに関して検討する。

(3) 調査対象のジェンダー講座と学習者

2000年A市で開催されたジェンダー学習講座は、ジェンダーに敏感な視点を養うための啓発講座であった¹²⁾。応募者125名のうち抽選により参加者は37名であり、保育利用者17名、年齢層は30-60代と幅広い。A市は夫がサラリーマンで、高学歴の主婦が多く住む地域である。学習者の多くは、能力と就業意欲を持つ生命再生産活動に特化した妻（生活ジェンダーとしての「主婦」）たちであり（国広2001：10-12）、子育てをしながら、または子育てを終えて、自分探しのために応募してきた¹³⁾。講座のタイトル「私が私であるために」は当時の学習者の想いを代表しており、タイトルに惹かれて受講した人も少なくない。

プログラムは、2回の講義と7回のワークショップで構成された計9回の講座である。講義は「見てみようCMの中の女達」、「主婦の今とこれから～専業主婦は不滅なの？～」をテーマとし、講師から学び情報や知識を得ている。

ワークショップは、「チャレンジ「私発見」」と題し、学習者が話し合いの中で

自分自身をふり返り、気づき、精神的・経済的自立のための意識変容や行動変容をめざすことを目的としている。グループで「夫婦・親子関係、仕事、復帰、年金、アンパイドワーク、人生設計」のテーマ別にわかれ文献講読、施設調査、資料収集などの作業をし、話し合い学習¹⁴⁾をとおして相互に学びあい、最後に発表するという方法をとった¹⁵⁾。

この講座修了後、学習者が自主グループを立ち上げた。そこでの学習を生かし、行政に場所を提供してもらい子育て支援活動へと発展させていった¹⁶⁾。

5. 事例による「確認の気づき」と「意識変容の学習のプロセス」の分析

今回の調査¹⁷⁾で、12名中9名に「確認の気づき」が見られた。以下の(1)の事例では確認の気づきの3タイプと、「意識変容の学習のプロセス」の3パターンを紹介する。「確認の気づき」が生じている語りは、下線で示した。

(1) Aさん

Aさんは家事に仕事に忙しい母親を見て育ったが、大学や職場でも、男女差別はほとんど感じなかったという。だが大学卒業後ブラジルに研修留学し、日系人の裕福な家庭にホームステイしたときに、文化の違いと女性の地位の低さを感じた。表面的にはすごく女性には優しい夫が、妻には家計を任せないことを聞き、初めて男女差別に気づく。実はAさん自身も結婚後、子育てをしながら、精神的に満たされないものを感じていた。子どもを預けて働きたいと夫に相談すると、簡単に了解してくれた。それにもかかわらず、その後も子育てに専念したのは仕事を続けていく自信がなかったからだ。その時、「夫が反対していれば、子育てに専念する理由になった」と述べ、夫に責任転嫁することで、行動を正当化しようとしていた自分をふり返り、講座では次のように気づきが生じている。

(講座を受講して)子育てを終えた他の受講者が『子どものため、家族のためによい妻、よい母、よい主婦を一生懸命にやってきたんだけど、子どもが巣立って、私ってなんだったんだろう、私はこの後どうすればいいのだろう』と切実に語ったことを聞いて、子どもとか夫や家族が理由ではないんだと改めて思って、やっぱり、やりたいことがあったら自分で自分のことは考えて、やっていかないといけないんだと思いました。

Aさんの、講座受講前の精神的自立に関する前提は「自分の生き方に関して、

夫や家族を理由にしてはいけない」である。

他の学習者の発言を聞き、自分自身の問題としてとらえて、気づきが生じている。「改めて思って」といっているように、前提が正しかったと確認している。その後で、「やっぱり」という言葉からわかるように、自分のことは自分で考えて決めるという前提を確認している。講座では、他の学習者からの発言で自らの前提を確認し、さらにその前提を強めていると言えよう¹⁸⁾。意識化された前提を再肯定し強めるものの意識レベルにとどまる「確認の気づき」によって前提をふり返り根づかせている。学習することによって再度気づいたことであり、これが筆者の定義した「確認の気づき」である。

Aさんの意識変容の学習のプロセスのパターンは、意識化された前提を再肯定し意識変容するプロセス (b) パターンである。

講座での意識変容の後、Aさんは働くためには専門性が必要だと気づく。結婚前、大学での学びを生かして、児童福祉施設で幼児教育関係の仕事に携わっていた。仕事では、幼児教育の専門的な資格保有者が、それぞれのクラスを担当できた。女性差別を感じたことは、ほとんど無かった。Aさんは講座受講前、夫から働く了解を得たときに、「今、私は何で勝負できるの?」と自分自身を問い直し、専門性の必要を感じている。

一昨年ぐらいから、やっぱり (働くには) 何か自分の武器がないと、専門性や資格がないといけないと思いました。それで去年から、(結婚前と同じ) 児童福祉施設で講師として働いています。専門性を生かすことによって、不安定に揺れ動いていた自分は少し落ち着き、ゆっくり歩き出しているのかなと思います。今後はさらに力強くスピードを上げ、確実に進んでいかなければならないと思います。行き先、道順はある程度見えているので、これからは、力強くスピードを上げ進んでいきます。今の私は行動することが重要なのだと改めて思います。

Aさんは幼児教師の専門性を生かし週2回の親子講座の指導を始めた。講座後の経済的自立に関する前提は「(女性が) 働くには専門性が必要」である。女性が職業を持ちにくい現代社会で女性の経済的自立には、専門性が必要であることを確認している。

Aさんは職を得るという行動に進んでいるので、意識化された前提を再肯定し強め行動レベルに至る「確認の気づき」が生じている。意識変容の学習のプロセスのパターンは、意識化された前提を再肯定し意識変容するプロセス (b) パ

ターンである。専門性や資格といった具体的な「確認の気づき」も行動変容につながりやすい。しかし、これらの気づきは、「混乱するようなジレンマ」の状態から生じた、前提を覆すような気づきではない。

Aさんと同様に意識化された前提を再肯定し行動レベルに至る「確認の気づき」は他の学習者（注14参照）にも見られる。

Dさんは「（講座で経済的自立に気づいたが、さらにインタビューで）自分で誰にも気兼ねすることなく使えるまとまったお金は大事かと思います。それだけの金額をへそくりで捻出しても、後ろめたさがありますよね」と述べ、講座受講後に英会話講師の仕事をしている。

Eさんは「（主婦になじまないという意識があったが）主婦という世間的に従属的な身分になったとしても自分をあきらめなくて良いという考え方が確認できた」と気づき修了後、他の受講生の紹介で就職している。

Fさんは「今やっと勉強し始めたんです。やっぱり私は勉強したかったんだなって思うんです」とインタビュー後に放送大学に入学した。

Gさんも「やっぱり、経済的自立というのが私の最終目標だったんだなと思いきこしました」と、述べ本調査中に英語翻訳の学習を始めている。

どの事例でも、前提を再肯定し強め行動レベルへ至る「確認の気づき」が生じたことがわかる。

(2) Bさん

Bさんは、働く母親の生き方を見て、結婚しても一生働こうと思っていた。大学までの学生生活の中でジェンダーを意識したことはなく、仕事を選ぶ基準は、『結婚しても働きやすい会社』だった。結婚と同時に会社を辞め、夫について全国を転々とする生活が始まったが、子供が出来るまでは転勤先の地で仕事をしていた。しかし、子育てや家事との両立は難しく、仕事をする気力が無くなったという。子供が成長し、「自分はこの先どう生きていけばいいのだろうか？」と不安な気持ちを持つようになった時に参加したのが講座であった。講座でのプロフィールには「私は、主婦、母親である前に”自分“でありたいと思うのです」と書いた。

（講座受講前は）専業主婦である自分に劣等感を感じていました。主婦である以外に『自分』がなかった。講座での学びは、「○○のママ、○○の奥さん」ではない“私”というものを実感できました。母は働いていていたんですけど、父におこられても反抗しない母なので、（そ

の影響で)私も夫に何も言えなかったんです。夫が「こうして」と言えば「はい」と、「ああして」と言われると「はい」って言ってたんです。「二人目の子どもはほらない」と言っていた夫に、「私は子どもが欲しいのよ」、「私は何かしたいのよ」と、自己主張できるようになりました。夫と毎晩ぶつかり合いで、一緒にやっていくのは無理かなーって思っただけかしてました。だんだん夫も私の説得に負けたのか、「二人目いいかな」と言うようになってくれたんです。夫婦が共に自立することの大切さを学びました。

Bさんの講座受講前の精神的自立に関する前提は、「専業主婦に劣等感を感じる、自分らしく生きる」である。学生時代から、母親の影響で結婚しても働き続けようと思っていたBさんにとって、専業主婦である自分は満足できる自分ではなかった。

学習することによって、自分らしく生きることの大切さを再確認した後、夫に対して自己主張ができるようになり、夫とのコミュニケーションも改善され、夫婦関係がよくなった。意識化された前提を再肯定し強め行動レベルに至る「確認の気づき」が作用している。

意識変容の学習のプロセスのパターンは、意識化された前提を再肯定し意識変容する (b) パターンである。

Bさんは講座修了後、他の学習者達と子育て支援活動を始め行動に移した。しかし、調査時は二人目の子どもが生まれ、子育て支援活動をやめ、育児に専念し、帰宅時間の遅い夫と子育ての狭間で不安を抱えていた。

毎日の生活でクタクタなのですが、時間はどんどん過ぎていくし、『この先どうなってしまうのだろうか』という不安ばかりが大きくなっている毎日を過ごしています。夫には「自分が何か行動しなければ変わらないのだから、子どもを保育園に預けてもいいから、何かしなさい」と言われたんですけど、夫は早く帰ってきて家事をしてはくれるような人ではないので、仕事をしたら家事も自分が全部やらないといけないと思ったら、自分が死んじゃうわと思いました。講座をうけて何か変わったはずなのに、また講座を受ける前のような気持ちになってジタバタともがいている自分をみると、結局あの時は変わらなかった、変わったような錯覚を起しただけなのではないかという思いになっています。

Bさんは、自分自身の行動に対しては、「何も変わっていない」と、述べている。講座を受講して、「自分らしく」生きる大切さを再確認し、子育て支援活動を始めたが、第二子の誕生で活動を止め育児生活に戻り、自分に焦りを感じていた。

講座受講後の精神的・経済的自立に関する前提は、「性別分業の否定、自分らしく生きる、結婚しても一生働く」である。結婚しても働きたかったBさんだが、夫の家事不参加を再確認し、働くことの難しさを痛感している。しかし、「もがいている自分」という言葉から、「働きたい」、「自分らしくいきたい」、「夫にも家事をしてほしい」と前提を再確認し強めていることが伺える。講座受講時は行動にまで進むという意識変容が起こっているが、調査時のBさんは子育てのために一時立ち止まっている状況である。意識化された前提を再肯定し強めるものの意識レベルにとどまる「確認の気づき」である。

意識変容の学習のプロセスのパターンは、意識化された前提を再肯定し意識変容する（b）パターンである。

Bさんのように、働きたくても、自分らしく生きたくとも行動に移せない女性は多い。子育て中の女性が自立するには、本人の意識変容のみならず家族や社会のサポートが不可欠である。

Bさんと同様に、意識化された前提を再肯定し強めるものの意識レベルにとどまる「確認の気づき」が次の4人にみられた。

Eさんは「（この調査で）インタビューを受けさらに記述しふり返ることによって）同じ意識の人たちと会えたことが大きな学習だったことを再確認できた」と語る。

Dさんは「自分たちの中に共有できるもの（性別役割分業観の否定や女性の自立に関して）を確認しあい、より親密に感じた」と述べている。EさんもDさんも同じ前提を確認しあうことで共感や親密感を認識し、前提をさらに強めているといえる。

Hさんは受講の最中に父親の死を経験した。「この世に生を受けたあかしを前向きに受け止めて、真摯に生きていこうと再確認できたことが、（講座を受講した）最大の収穫だった」と語っている。男女平等観を持つ父親の思いを、彼の死によって再確認している。

Iさんは、「（講座修了後の）子育て支援を立ち上げたメンバーで残っているのが私一人になりました。継続は力なり、やはり続けていくのが私のやり方なんだと再確認しました。自然にできることそれが大事なんだと納得できました」と語る。

このタイプの意識レベルにとどまる「確認の気づき」は、意識変容のプロセスで多くの学習者に見られる。この気づきを繰り返すことにより、前提が強化され行動レベルに至ると考えられる。

(3) Cさん

完全に性別役割分業をしていた両親のもとで育ち、中学・高校と良妻賢母を育てる女子高で学んだCさんは、結婚後も専業主婦として二人の子どもを育て、男性は外で働き、女性は家事という考えで暮らしていた。子育ても終わりCさんは、これからどうしようと思っているときに、講座のタイトル『私が私であるために』に惹かれて受講した。仕事と家事の両立を考えもしなかったCさんだった。

就職もせず大学で知り合った主人と結婚し、専業主婦として二人の子どもを育てたので、男性は外で働き女性は家のことをする、という考え方で暮らしてきました。子ども達も成長しその後巣立ち、一人の時間が多くなると、主婦の仕事って何だろうと真剣に悩んだことがあります。家族の調整役、便利屋、食事係、運転手…。『いなければ家族も困るだろうな！これが私の仕事かな、しょうがないか！』と諦めてもいました。主婦に関心があったので（講座では）アンペイドワークのグループに入りました。講座で赤ちゃんを抱きながら先生の講義を聞いている人を見て、すごく驚きました。それじゃー、こういう講座に来ているお母さんがたのお子さんを預かろうと思いました。

Cさんの講座前の性別役割分業に関する前提は、「男は仕事、女は家庭」である。講座で女性の自立を学び、「講座に来ているお母さん達のお子さんを預かろう」という、前提が変化する気づきが生じている。赤ちゃんを連れてでも講座で学びたいという女性がいることを知り、自分の能力は「子育ての経験で得たもの」と気づく。講座修了後に立ち上げた子育て支援活動のメンバーになり行動を起している。その後、Cさんは、社会福祉協議会で非常勤の職を得、A市の男女共同参画センターが募集した『市民・NPOがつくる男女共同参画事業』に応募し、連続講座¹⁹⁾を開講するなどの活動を続けている。

Cさんは、その後も学習を繰り返しながら行動しているので意識変容は進んでいると考えられる。この時の気づきは前提が変化する気づきなので、意識変容の学習のプロセスは (a) パターンである。

インタビューを受けてCさんは、活動をふり返り次のように語っている。

(講座は) 保育サービスもついていましたけど、こういう講座で子どもを預かるという子育て支援サークルを立ち上げたんです。(インタビューを受けて) 私ができることといたら、主婦でやってきたこと、子育てでやってきたことぐらいだから、それを使ってといたらお子さんをみることだったのかと思いますね。

Cさんの講座前後の意識化されていない前提は「主婦役割を生かしてできること」である。それは「主婦でやってきたこと、子育てでやってきたことぐらいだから、それを使ってといたらお子さんをみることだったのかと思いますね」との語りから推測できる。

インタビューを受けたときにCさんは初めて、主婦役割、母親役割の経験が能力であり活動につながっていることに気づく。この気づきは、前提を覆した気づきでも、再肯定する気づきでもない。無意識つまり意識化されていない前提を顕在化する「確認の気づき」である。無意識の中にあった主婦・母親として培った能力を生かすことが、「確認の気づき」によって顕在化している。

意識変容のプロセスのパターンは、意識化されていない前提を顕在化し意識変容するプロセス(c)パターンである。

今回の9人の調査事例から「確認の気づき」の3タイプと「確認の気づき」が関係する「意識変容の学習のプロセス」3パターンが明らかになった。意識変容を促す気づきの一つである「確認の気づき」はさらに意識を強め、学習のプロセスを促進する作用がある。

Aさん、Bさん、Cさんの3人はいずれも「混乱をするようなジレンマ」の中での意識変容ではなく、講座、家族関係、活動などの「日常生活の中」でのジェンダー学習によって気づきが生じている点も重要である。

意識変容後のCさんは、性別役割分業を肯定していた時期の、主婦や母親としての経験を逆に能力と認め、それを生かして、子育て支援活動や市民活動を行っている。

6. まとめ

分析の結果、以下のことが明らかになった。

(1) 3タイプの「確認の気づき」

「確認の気づき」は前提を強め、または顕在化させるという次の3タイプに分類できる。

- ① 意識化された前提を再肯定し強め行動レベルに至るタイプ
- ② 意識化された前提を再肯定し強めるものの意識レベルにとどまるタイプ
- ③ 意識化されていない前提を顕在化させるタイプ

3タイプのうち①は、AさんとBさんの事例が示すように、従前からの前提を強め行動に至る重要な気づきである。②は、AさんとBさんの事例が示すように、従前からの前提を強めるタイプであるが、行動には至らず意識レベルにとどまっている。③は、Cさんの事例が示すように、無意識の中にある前提、「意識化されていない前提」を顕在化させる気づきである。「意識化されていない前提」を確認することは、無意識の中の前提が強められているので意識変容といえる。

(2) 意識変容に関する新たな知見

本研究における分析結果は、クラントンによる「意識変容の学習のプロセス」のモデルに対して、下記の3点について修正を迫るものである。

第一に、Aさんの事例から、「確認の気づき」を繰り返すことにより前提が徐々に強められ、行動に結びつく可能性がある。特に気づきが具体的であることによって、それが顕著になるものと思われる。

第二に、行動が伴わない場合でも意識変容した事例を見出した。Aさん、Bさんの事例でのインタビュー時に生じた「確認の気づき」のタイプは、②意識化された前提を再肯定し強めるものの意識レベルにとどまるもので行動には至っていない。しかし意識は強められている。つまり、他者の前提や価値観を学んだ上で選び直した後に、もとの前提を再肯定し、強めた場合は意識変容とみなすことが妥当である。これはメジローのいうパースペクティブ変容にあたり、すでに述べたように意識変容の一つと考えてよい²⁰⁾。多くの場合、このよう意識レベルの気づきを繰り返しながら、行動変容に至るのである。

第三に、「日常生活」の場面でも意識変容が生じることが明らかになった。メジローやクラントンによれば、「混乱するようなジレンマ」の中で、前提を批判的にふり返った後に、前提が全く逆の考えに変化し、覆されて意識変容が生じる²¹⁾。しかし上記3つの事例は、「混乱するようなジレンマ」の状況ではない。講座受講、インタビュー調査時や日常生活のある時点でのふり返りでも、気づきが生じ意識変容が起こっている。これらのことは、ジェンダー学習の場合、劇的に環境が変化する時に生じる「混乱するようなジレンマ」の状況ではなく、ごく普通の生活の中でも学習者の気づきが生じることを示している。

(3) ジェンダー学習と「意識変容の学習のプロセス」

学習者には講座修了からインタビュー時までの6年間の学習で、それぞれ意識

変容がみられた。例えば、Aさんは「自分の生き方に関して、夫や家族を理由にしてはいけない」という価値観（意識化された前提）を学習によって強め、その後のさらなる学習によって自立をめざし、専門性を生かす仕事をするという行動変容を起している。

専業主婦というアイデンティティに劣等感を持っていたBさんは、自分探しのために、講座修了後に子育て支援活動という社会参加型の行動変容を起している。インタビュー当時は活動を休止している自分自身に悩んでいたが、それは一時的な状況と考えられる。「意識変容の学習のプロセス」は、Bさんの事例のように時には立ち止まりながら、らせん状に進むプロセスと考えられる²²⁾。

Cさんは、学習により前提（性別役割分業観）を変化させている。その後の学習を続けることによって、子育て支援活動や非常勤の職を得るという行動変容に至る。主婦役割や母親役割という性別役割分業で得た能力を自立のために生かしており、主婦や母親としての経験が、専門性の一つになった例である。性別役割分業の中で培った能力を、ジェンダー学習をすることで、逆に自立のために生かすことができた。

以上の例から、ジェンダー学習者の意識変容のプロセスは多様であるが、学習を重ねることによって意識変容し、らせん状に進みながらエンパワーメント²³⁾をめざして進んでいく様子を見ることができた。

(4) 「意識変容の学習のプロセス」の3パターン

以下の3パターンの「意識変容の学習のプロセス」を明らかにすることができた。

- (a) 意識化された前提が変化し意識変容するプロセス
- (b) 意識化された前提を再肯定し意識変容するプロセス
- (c) 意識化されていない前提を顕在化し意識変容するプロセス

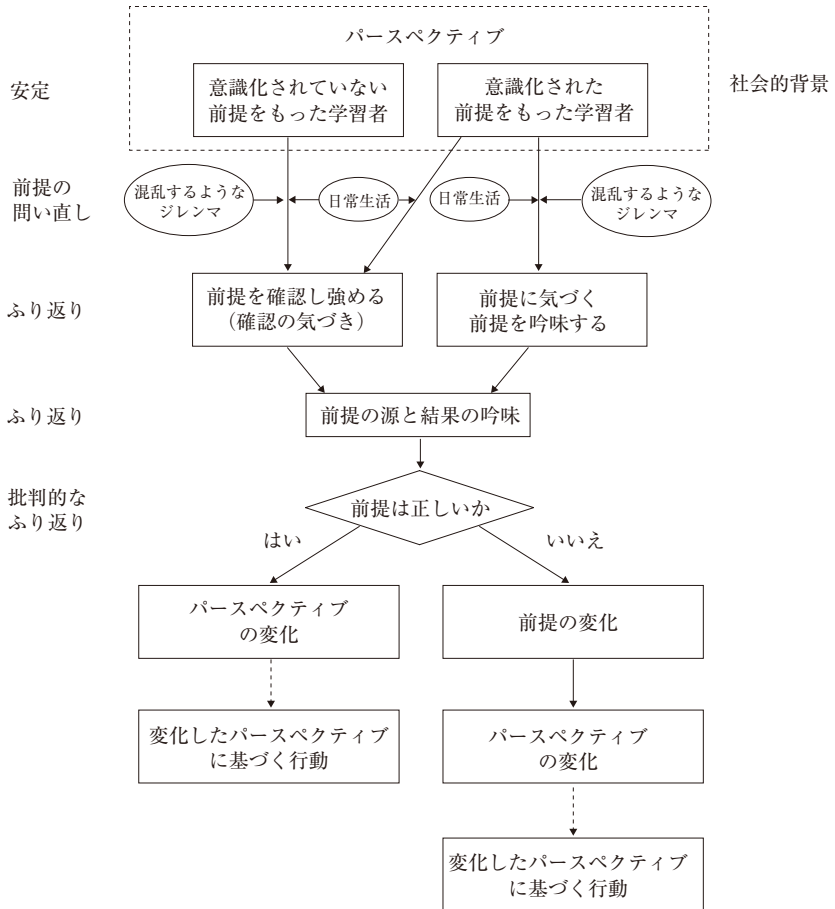
3パターンのうち、「確認の気づき」が関係するのは、(b)、(c)パターンである。AさんとBさんは(b)パターンであり、意識化された前提を再肯定し強めるものの意識レベルにとどまる「確認の気づき」と、意識化された前提を再肯定し強め行動レベルに進む「確認の気づき」が作用している。Cさんは(a)と(c)パターンが現れている。(c)パターンには、意識化されていない前提を顕在化させる「確認の気づき」が作用している。

(5) 「意識変容の学習のプロセス」の修正モデルの提示

以上の結果にもとづき、クラントンの「意識変容の学習のプロセス」を精緻化し一般的なモデルを作成したのが図-2である。しかし女性の学習者の意識変容

は多様であり、クラントンが述べるように、「意識変容の学習のプロセスは一人ひとり異なっている」ことをつけ加えておく必要がある。

図-3 「意識変容の学習のプロセス」の修正モデル



以下に図-3を説明する。

- 1) 「意識化された前提を持った学習者」の意識変容の学習は、二つに分かれて進む。一方は、クラントンの変容過程とほぼ同じであり、他方は、「確認の気づき」の作用により、もとの前提を再肯定し強めるものである。「混乱するようなジレンマ」ばかりではなく、「日常生活」の中でも気づき

が生じる。

- 2) 「意識化されていない前提をもった学習者」の意識変容の学習においては、「確認の気づき」の作用で前提が顕在化する。
- 3) 1) と 2) のどちらの場合も、前提についての批判的ふり返りで、「はい(正しい)」と判断したとき、前提は再肯定され強化される。これがメジローのいうパースペクティブ変容に相当する。だが「いいえ」と判断したときは、前提が変化し、パースペクティブも変化する。従ってここでは、クラントンの図-1にあった、もとの前提にもどる矢印<a>の部分が削除され、パースペクティブ変容へと進む。また意識変容は必ずしも行動を伴わないととらえるため、行動へ進む矢印は点線で示す。

以上のように「確認の気づき」にもとづき、ライフストーリーを用いて女性のジェンダー学習による意識変容を分析し、「確認の気づき」の概念化と「意識変容の学習のプロセス」に関する知見によって、「意識変容の学習のプロセス」のモデルの精緻化を試みた。本研究により、女性たちの問題意識や生き方は多様であるが、ジェンダー学習を通して「確認の気づき」が促され、それが意識変容を促進することが明らかになった。

7. 今後の課題

1999年の男女共同参画社会基本法の施行前後には、女性の社会参画や意識変容を促すためのジェンダー学習講座が、各地の女性センターや社会教育施設で開講されていた。自治体レベルでの制度構想や真の女性の声の反映など、「共同参画」を生かす女性の力量形成が社会教育に求められたためである(中藤2005: 221)。講座の内容は、ジェンダーに敏感な視点養成や、女性のキャリア形成など女性の生き方に関するテーマが多く、性別役割分業観にとらわれていた女性の考えかたや価値観を問い直すものであった。ところが、介護問題、子育て問題、共働き世帯の増加、離婚の増加など、女性たちが抱える問題が山積しているにもかかわらず、ジェンダーパッシングや社会・経済の悪化などが行政に影響を与え、講座の数は年々減少傾向にある。男女が共に支えあう豊かな社会を形成するためには、行政や民間による社会構造の改革とともに、今後も意識変容を促すジェンダー学習は必要である。

気づきによる意識変容の分析はまだ踏み出したばかりであるが、「確認の気づき」が意識変容を促す一つの重要な要因であることがわかった。「確認の気づき」の研究に関しては、さらに多くの事例収集と分析が求められる。本研究の事例対

象者は、東京近郊のサラリーマン家庭の主婦であるが、対象とする地域を広げ、専業主婦に限らず働く女性や男性など多様なジェンダー学習者²⁴⁾の事例収集も必要である。それらをふまえた、さらなるモデルの精緻化を深めたい。

意識変容の学習に取り組む学習支援者の立場から見ると、公的な学習機会に限らず、日常生活の中の多様な問題や場面に関しても学習者に「確認の気づき」を促すような支援が必要であろう。そして、変容した意識をさらに定着させ、前進させるには、「確認の気づき」を促すためのプログラム作成や支援方法も検討課題である。

(やまさわ かずこ 日本女子大学大学院博士課程後期)

〔謝 辞〕

本研究にご協力いただいた12人の講座修了生の方々に、心から感謝の意を表します。

〔注〕

- (1) 最近は女性センターや社会教育施設を男女共同参画センターと改称する施設が多く、2008年国立女性教育会館の調べでは、全国の施設約370のうち三分の二が名称変更している
- (2) 『おとなの学びを拓く』（クラントン1992=1999：200）では「Transformative Learning：The Process」を「意識変容の学習のプロセス」と訳しており、筆者もこの訳を使用する。
- (3) 教師の授業リフレクション研究の立場からは「リフレクションを実施する教師自身の『気づきself awareness』を大切にすると、指導者にとっての気づきをもつ重要性を述べる研究もある（澤本1999：130）。気づきに注目することは学習者のみならず、指導者にとっても重要なことである。
- (4) 気づきの類型化

気づきは、対象者別と段階別に分類できる。

1) 対象者別は3分類に大別でき、さらにそれぞれ細かく分類すると、合計7類型になる。

- ①「自己に関する気づき」…自分自身のふるまいや考え方に対して生じる気づき
自己認識型、家族関係型、経済的自立型、社会関連型
- ②「他者との関係に関する気づき」…他者から影響を受けて生じる気づき
影響型、共有型
- ③「社会に関する気づき」…自分を取り巻く社会の問題に対して生じる気づき
社会認識型

2) 段階別は、「発見」と「確認」の気づきの2分類に大別でき、さらにそれぞれ意識レベル、行動レベルに分類でき合計4種類になる

- ①「発見の気づき」…これまでの前提を批判的にふり返り、新しい前提を発見する気づき
で意識レベルにとどまる気づきと、行動レベルに進む気づきがある
- ②「確認の気づき」…意識化された前提を再確認し意識を根づかせ強める気づきで意識レベルにとどまる気づきと、行動レベルに進む気づきがある

対象者別の7類型と段階別の4種類の気づきをかけあわせると、概念上28類型の気づきの型がある。これら28類型のうち調査では20類型が明らかになっている（山澤2008：71）。しかし、この論文は気づきの類型化が試みられており、確認の気づきに言及したものではない。

- (5) メジローは最近では意味パースペクティブ（meaning perspective）のかわりにframe of referenceの語を用いているが、本論では前者を使用する。
- (6) メジローとクラントンの理論については原文のtransformative learningの訳として「意識変容の学習」の語を使用する。
- (7) 「パトリシア・クラントン著、入江直子・豊田千代子・三輪建二訳 1999『おとなの学びを拓く』鳳書房、205」ではメジローの原文の「disorienting dilemma」を「混乱を引き起こすようなジレンマ」としているが、筆者は「混乱するようなジレンマ」と訳した。
- (8) ユングは人のパーソナリティを次のように分類している。まず「外向」と「内向」という二つの「一般的な構えのタイプ」を定義し、さらに「思考」、「感情」、「感覚」、「直感」という四つの機能を用いて「外向的思考タイプ」、「外向的感情タイプ」、「外向的感觉タイプ」、「外向的直感タイプ」、「内向的思考タイプ」、「内向的感情タイプ」、「内向的感觉タイプ」、「内向的直感タイプ」の8つのタイプに分類している。（C. G. ユング1967=1987：354-439）
- (9) 三輪建二は、『おとなの学びを創る』の解説でこのように述べている。筆者も同氏の意見を支持する。（クラントン1996=2004：311）
- (10) 暗黙知（tacit knowing）とは、自分自身で語ることでできない知識のことでマイケル・ボラニーが提示した用語である（ボラニー=1966=2003：13-47）。
- (11) 今回は「確認の気づき」について検討するため、他の種類の気づきについての分析は試みていない
- (12) 筆者はコーディネーターとして講座の企画段階から関わり、ワークショップでは学習支援を担当した。
- (13) 1996年にA市で子育て中の30代の母親に行った調査がある（矢澤・国広・天童2003：110）。そこでは、「自分の生き方への納得」が困難な主婦の状況が、日ごろの生活のストレスと絡み合って女性たちの「社会への不満」意識となっている点がかがえたと述べられている。A市には、能力があるのにそれを生かすことができず、自分の生き方を模索し悩んでいる女性たちが多い。この講座は、その調査の対象者と同様な意識を持つ女性たちが、年代を超えて多く受講していた。
- (14) ブルックス等はグループでの語りの中から意識が変容することを示唆しており（Group for Collaborative Inquiry1993：43-51，ブルックス2002：152），教師が知識を授けてくれるのを待つのではなく、自主的に物を考え、自分自身の創造力と批判的思考力と分析力に自信をもつようにさせること…を達成する（藤村1996：5）ため、話し合い学習はジェンダーを学ぶときに適している。
- (15) ワークショップは、同市、前年度のジェンダー講座「始めよう！私の一歩」の学習支援者である藤村久美子氏が行った方法を参考にしている。「始めよう！私の一歩」の受講者の一部が今回の講座の運営委員となり、企画運営に携わった。
- (16) この頃から各地域で子育て支援のグループ活動が盛んになってきており、各地で行政が活動支援する動きもみられてきている（岩崎・中野2002：62-63）。
- (17) 調査対象者と期間・方法：調査者対象者はジェンダー講座の受講者12名である。年齢、家族構成、職業の順に照会する。
A：45歳、夫・子、幼児教育講師/B：36歳、夫・子2、PTA役員/C：54歳、夫・子2、子育て支援カウンセラー/D：48歳、夫・子3、英会話講師/E：48歳、夫・子1、英語翻訳/F：

48歳, 夫・子1, 放送大学学生/G: 37歳, 夫・子2, 英語翻訳講座受講中/H: 58歳, 夫・子2, ボランティア団体代表/I: 54歳, 夫・子2, 民生委員・子育て支援/J: 49歳, 夫・子2, バレエ教師/K: 36歳, 夫・子1, PTA委員/L: 41歳, 夫・子2, パート勤務。
この12名は各々気づきが生じていたが, 今回の研究で確認の気づきが見られたのは, A~Iさんの9名であった。

期間と方法は,

- ①個人インタビュー調査, 学習者1人につき2時間程度を2日間 (2006年5月~7月)
- ②学習者がライフストーリーを記述 (2006年8月~9月)
- ③グループインタビュー1回 (2007年1月~3月) 各3名ずつ2時間程度, 計9名。

グループインタビューが9名であるのは, 同世代, その後同じ活動をしているなどの理由からである。

- (18) クラントンも, 他者との関係における意識変容の必要性を述べている (クラントン・カルセッタ2004: 12-17),
- (19) 連続講座は「主婦だって, 2007年問題。定年は男性だけ?」のテーマで, 妻として母として過ごしてきた中年女性たちが, 生き生きと自分らしく過ごすことを目的としている。
- (20) 三輪も同様にクラントンの図-1に対して「図では右の矢印に進むことが意識変容の学習となっており, もとにもどる矢印は意識変容の学習には組み入れられていない。さらに発展させて, もとの位置にもどる矢印であっても意識変容は生じているという立場にたちたいと考えている」と語っている (三輪 2007: 139)
- (21) 筆者も「混乱するようなジレンマ」の場面で, 意識が大きく変容することには同意する。
- (22) 成人学習のプロセスは実態の把握, 課題の設定, 暗黙知や実践知の明確化, 意識変容の学習, 自己決定学習, ふり返りとあらたな実態の把握・学習課題の設定などのポイントがお互いに重なりあひながら (ときには順番を入れ替えながら), 螺旋的な学習プロセスになる (三輪2009: 166)
- (23) 本論におけるエンパワーメントはジェンダー学習によって女性が精神的, 経済的な自立のための力をつけることとする
- (24) 男女がともに暮らしやすい社会の実現のためのジェンダー学習は男性にも必要である。男性を中心にした「意識変容のプロセス」に関する研究は (山澤 2002: 21-34)『成人教育における「男性問題」学習者の意識変容』があり, 「意識変容の学習のプロセス」のモデル化が試みられているが, 気づきによる分析はされていない。今後さらなる研究が求められる。

[引用文献]

- 安藤耕己 2004「成人の学習におけるライス・ヒストリー法」日本社会教育学会編『成人の学習』日本の社会教育48
- Brooks, Ann. K 2002 "Transformation" *Women as Learners The Significance of Gender in Adult Learning*. Jossey-Bass.
- Cranton, Patricia 1992 *Working with Adult Learners*. Wall & Emerson, Inc. Canada.
- Cranton, Patricia 1992 *Working with Adult Learners*. Wall & Emerson, Inc. Canada. (= 1999 パトリシア・クラントン著, 入江直子・豊田千代子・三輪建二訳『おとなの学びを拓く』鳳書房)
- Cranton, Patricia 1996 *Professional Development as Transformative Learning*. Jossey-Bass (= 2004パトリシア・クラントン著, 入江直子・三輪建二訳『おとなの学びを創る』鳳書房)
- Cranton, Patricia 2000 "Individual Differences and Transformative Learning" Jack Mezirow &

- Associates *Learning as Transformation*. Jossey-Bass.
- Cranton, Patricia and Carusetta, Ellen, 2004 "Perspectives on Authenticity in Teaching" *Adult Education Quarterly* vol55, 1
- 藤村久美子 1996 『女性学の授業改革』(未発表論文)
- フレイレ, パウロ著, 柿沼秀雄訳・大澤敏郎補論 1992 『自由のための文化行動』亜紀書房
- Group of Collaborative Inquiry 1993 "The Democratization of Knowledge" *Adult Education Quarterly* 44
- 池田和嘉子 2004 「エンパワーメントをめざす女性の学習」日本社会教育学会編『成人の学習 日本の社会教育』48
- 入江直子 1992 「自分を見つめ, “共同”の関係を育てる — 中野区女性会館における学習者の主体形成 —」社会教育基礎理論研究会編『叢書生涯学習 X 生活世界の対話的創造』雄松堂
- 岩崎久美子・中野洋恵 2002 『私らしい生き方を求めて 女性と生涯学習』玉川大学出版部
- Jung, C. G 1967 *Psychologische Typen* Rascher Verlag, Zurich (= 1987 C. G. ユング著・林道義訳 1987 『タイプ論』みすず書房)
- 小池源吾・志々田まなみ 2004 「成人の学習と意識変容」『広島大学大学院教育学科紀要』第三部 第53号
- 国広陽子 2001 『主婦とジェンダー』尚学社
- Merriam, Sharan B and Caffarella, Rosemary S. 1999 *Learning in Adulthood A Comprehensive Guide*, 2/Edition John Wiley & Sons, Inc. (= 2005 シャラン・B・メリアム, ローズマリー・S・カファレラ著, 立田慶裕・三輪建二監訳『成人期の学習 理論と実践』鳳書房)
- Mezirow, J 1981 "A Critical Theory of Adult Learning and Education" *Adult Education* vol. 32, 1
- Mezirow, J and Associates, eds. Fostering 1990 *Critical Reflection in Adulthood*. San Francisco. Jossey-Bass.
- Mezirow, J 1996 "Contemporary Paradigms of Learning" *Adult Education Quarterly* vol. 46, 3
- Mezirow, J 1998 "On Critical Reflection" *Adult Education Quarterly* vol48, 3
- 南澤由加里 2006 「ギデンズのアイデンティティ変容理論と生涯学習」赤尾勝己編『現代のエスプリ 生涯学習の諸相 その理論・制度・実践』No.466至文堂
- 三輪建二 2007 「生涯学習における学習者像と学習支援」『生涯学習と自己実現』(財)放送大学教育振興会
- 三輪建二 2009 『おとなの学びを育む』鳳書房
- 中藤洋子 2005 『女性問題と社会教育 ジェンダーの視点に立つ成人の教育・学習論への試み』ドメス出版
- Polanyi, Michael 1966 *The Tacit Dimension*. Routledge & Kegan Paul Ltd. (= 2003 マイケル・ポラニー著, 佐藤敬三訳・伊東俊太郎序『暗黙知の次元 言語から非言語へ』紀伊国屋書店)
- Schon, D. A 1983 *The Reflective Practitioner:How Professionals Think in Action*. New York. Basic Books
- Schon, D. A 1983 *The Reflective Practitioner:How Professionals Think in Action*. New York. Basic Books (= 2007 ドナルド・A・ショーン著, 柳沢昌一・三輪建二監訳『省察的实践とは何か』鳳書房)
- 桜井厚 2003 『ライフストーリーとジェンダー』せりか書房
- 澤本和子 1999 「教師の成長とネットワーク」藤岡完治, 澤本和子編『授業で成長する教師』ぎょうせい

- 常葉-布施美穂 2004「変容的学習—J・メジローの理論をめぐって」赤尾勝己編『生涯学習理論を学ぶ人のために』世界思想社
- 矢澤澄子・国広陽子・天童睦子 2003『都市環境と子育て—少子化・ジェンダー・シティズンシップ—』勁草書房
- 山澤和子 2002「成人教育における『男性問題』学習者の意識変容」日本女子大学大学院『人間社会研究科紀要』第8号
- 山澤和子 2007「女性の意識変容の促進におけるライフストーリーの有効性—『気づき』に視点をあてて—」日本生涯教育学会論集28
- 山澤和子 2008「『気づき』からみた女性の学習と意識変容」『日本学習社会学会年報』4

Process of Transformative Learning of Gender Learners from the View Point of “Awareness”

— A Study on the Process of Transformative Learning by P.Cranton

YAMASAWA Kazuko

(Graduate Student of Japan Women’s University)

Around 1999, when the Basic Law for Gender-equal Society was enacted, many institutions of social education in Japan, such as women’s center or community centers offered courses in gender studies. The aim was to support women so that they could become free from gender roles. This study investigated gender learners who studied how to become more independent, and analyzed their process of transformative learning by using their life stories. The purpose of this paper is to consider “confirming awareness” and to make a new model on the process of transformative learning other than that of the P.Cranton’s model.

Confirming awareness which has already been proven by other reports is important in the process of transformative Learning. I basically use the transformative learning theories of J.Mezirow and P.Cranton, and the reflective theory of D.Schon. I examined confirming awareness from gender learner’s life stories and found the following 5 results. First of all, there are 3 type of, confirming awareness: 1.intensifying the assumption of transformative learning and advancing to the action level, 2. intensifying the assumption of transformative leaning that doesn’t advance to action and 3.one that clearly exist from tacit knowing. Secondly, there are 4 patterns that confirming awareness is concerned with in the process of transformative learning. Thirdly, when confirming awareness is repeated, it is possible to embody in further action. Fourthly, the transformation of Gender learners occurs even when they affirm that an assumption is correct. Fifthly, confirming awareness works in transformative learning not only when learners have disorienting dilemmas but also in their daily lives.

Thus I found 5 types of information from this study, and tried to remake a new elaborate process of transformative learning using them.

Key words: transformative learning, confirming awareness , assumption, gender learners, life story